

浮世草子怪談集

叢書 江戸支庫 34

責任編集＝高田 衛・原 道生

校訂＝木越 治

国書刊行会



叢書 江戸文庫 34

責任編集 高田 衛・原 道生

校訂 木越 治

世草子怪談集

国書刊行会

浮世草子怪談集

叢書江戸文庫 34 責任編集 高田衛十郎 原道生

一九九四年十月二十日 初版発行

校訂者 木越治

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都板橋区志村二一〇一五

電話〇三・五九七〇・七四二一 FAX(五九七〇)七四二七

印刷 セイユウ写真印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

装釘 藤林省三

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-336-03534-2

目次

多満寸太礼	5
和漢乗合船	145
金玉ねぢぶくさ	247
解題——木越治	331

凡例

一、本書には、浮世草子時代に刊行された三編の怪談集『多満寸太礼』『和漢乗合船』『金玉ねぢぶくさ』を収める。底本の所蔵者はいずれも国立国会図書館である。なお、底本に欠ける『多満寸太礼』序文、『和漢乗合船』巻五欠丁部分及び『金玉ねぢぶくさ』初版本刊記については、それぞれ、富山大学ヘルン文庫蔵本・京都大学文学部蔵本・東京大学霞亭文庫蔵本を使用した。使用を許可された各図書館に感謝いたします。

一、本文は底本通りに翻刻することを原則としたが、本叢書の方針に従い、次のような点を配慮した。

1、漢字は原則として通行の字体に統一した。異体字についても同様の処置を取ったが、誤字・宛字等はおおむね原文通りとし、はなはだしいものについては「ヘママ」と注記した。なお、文字が欠けていて意味の通りにくい場合は「」を付して補うことがある。

2、仮名遣い・振り仮名は底本のままとしたが、振り仮名のうち衍字と思われるものはおおむね省略した。ただし、捨て仮名はそのまま残すようにした。

3、濁点・句読点等は底本のを尊重しながら適宜取捨し、読みやすくなるように心がけた。また、同様の意味で会話部分の「」や書名に付す「」等を補い、さらに、内容に応じて段落を設けた。

4、踊り字については、仮名一字は「ゝ・ゞ」を、漢字一字は「々」、二字以上の場合には「く・く」

に統一した。

5、挿絵の位置が正しくないものは、正しい位置に移した。

一、本叢書の方針に従い、各篇の最初に目録を一括して掲げた。原本の状態については、解題の書誌の項を参照されたい。

一、基本データの入力に関して、金沢女子短期大学平成三・四年度国文演習Ⅲに参加した諸嬢の協力を得ました。また、『金玉ねぢぶくさ』に関して勝又基君の助力を得ました。ここに明記して、心より感謝するものです。

多満寸太礼

序

今はむかし昔を今の世談は絶ずして、しかも勸善懲惡の人をみちびくの至道なるをや。爰に濃州大垣の産辻堂氏非風子、いとまの日此草子を著し伝ふ。詞華言葉鮮なれば、握翫して夜のながさの友とし、且食を忘るゝのあまり、あなたこなたの同志にさら／＼ととりわたしぬれば、風の挙たる玉すだれのつれ／＼もなきこゝろおもしろや。

城南

挙堂印

甲申孟春

多満寸太礼卷第一

目録

天満宮通夜物語てんまんぐうつやものがたり

宰符僧蒙清水觀音利生事さいふのそうかうむるきよみづのくわんおんのりしやうを

仏御前靈会縁ほとけごぜんのれいくわいろく

仁王冠者之事にわうくわじやが

多満寸太礼卷第二

目録

丹州橋立晚翁登銀河事たんしゅうはしたてのげうおうのぼるあまのがわに

岩成内匠夢の契の事いわなりたくみゆめちぎり

芦名式部妻鬼女となる事あしなしまがつまきぜよ

四花の争論 しやくわのしやうろん

多満寸太礼卷第三

目録

秦兼美幽冥録 はたのかねみゆうめいのろく

強盜河辺悪八郎が事 べうだうかわべのあく ちやう

柳情靈妖 りうせい の れいよう

富貴運数之弁 ふうきうんすうの べん

多満寸太礼卷第四

目録

上杉蔵人達二女強盗一事 うすざくらおふだき せんなんにうしに

ゆつるぎみやうじんばつするじやしんを
弓劍明神罰二邪神一事
くわしやのせつねこころしがいを
火車之説并猫取二死骸一事

多満寸太礼卷第五

目録

きづとまわのくにいた
木津五郎常盤国に至る事
むらかみさへもんつまでいしん
村上左衛門が妻貞心の事
えいこうつしまあいがうなぐ
永好律師魔類降伏の事
かわこそようけ
獺の妖姪

多満寸太礼卷第六

目録

片岡主馬之亮敵打之事
かたをかしゆめ すけかたきうちの

直江常高冥婚の怪
なを直 つねたかめいこん あやしき

堀江長七逢二狐妖情一事
ほり ちやう ちやう あふ きつねのようせい

行脚僧治二亡靈一事
あんぎやのそうおむるぼうれい

多満寸太礼卷第七

目録

万石長者の事
まんごくちやうじや

望海二女の情
ぼうかいじ ぢや なきけ

龍法坊 拜二七星一事
りうぽうぼう はいするしちせい

花木弁論并貧福問答
かほくのべんろん ひんふくもんだう

多満寸太礼巻第一

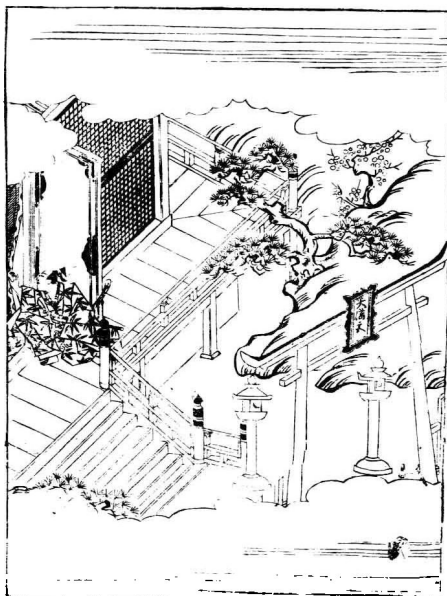
天満宮通夜物語

中比、尾州織田信長公の家臣に、星崎の城主岡田長門守といへる武勇の士あり。嫡子平馬の介何某とて、父におとらぬ大剛の者にて、詩歌の道にくらからず、義を専らとし、万つたなからず。

ある時、信長公、江州にとりつめ給ひし比、此平馬介も戦場におもむきけるが、当国上山の天神は靈驗あらたにおはします聞え有ければ、身の行衛をものり、且は又文道の祖神にてましますせば、結縁の為、夜にまぎれひそかに陣中を忍び出山上しけるに、聞及しより貴く、老松秀て枝をまじへ、翠嶺東南にめぐりて山のよそほひ色をまし、蒼湖西北にたゝへて誠に神徳普天にみち、無辺の利益、国土に自在なり。地形すぐれて神徳の高きを表し、眺望はるかにして靈威をしめす。御燈の光影すみて何となく名残おしければ、「よしや、明日はいかなる敵の手にかゝりてか、露の命を殞さむもしられぬ身なれば、こよひは通夜して浮世の名残ともせばや」と思ひ、拝殿の片隅にうづくまりゐけるに、夜もいたく更ぬるに内陣に人のおとなひしける。ふしぎに思ひさしのぞき見けるに、七旬にあまりたる老僧の、うす墨の衣におなじ色なるけさをかけ、菩提樹の珠数つまぐりたり。一人は四十年あまりの女性のいとけだかきが、紅梅の小袖にねりの一重を打かけり。一人は髪をからはに上たる容顔美麗の童子、身には目なれぬ唐織の衣をきたり。今一人は眼さかしま

にきれ、烏帽子引こみ、直垂の下に腹巻し、弓矢かきおひ、いきほひ有て見へけるが、座上の老僧申されけるは、「面々はいかなる故により爰にはこもり給ふぞ。明なむまでは遙なり。且はさんげの為なれば、願の品を夜すがら語り申さむにや」とのたまへば、連座の人々、「誠に一樹の陰一河の流、浅からぬ縁なるべし。かりそめながら、年ごとにかやうの同社して、たがひに名をさへ白浪の、かへる住家もいづくぞと、しらであらむも情なし。仰にしたがひうちとけて、心の底をもあかさばやとこそ思ひ侍れ」とあれば、件の老僧、「まづ何某は、むかし鳥羽院の御時、北面に召れる佐藤兵衛尉憲清と申者にて、若年の比より和歌の道に心をかよはし、其名世にたかく、雲の上に交をなし、君につかへて忠を忘れず、昇進とこほらずはなやかに時めき侍りしが、人界のありさま、生死流転のことはりを観じ、ふかく無常をはかなみ、妻子にも心をとめず、遂に出家し、名を西行と改め、道心堅固にして命終りぬ。

しかるに、在世の昔諸国修行しけるは、あこぎといへる詞をしらずして発心し諸国をめぐるなど、あらぬ事をのみ世に伝へ侍る。誠に道にうるときとてよしなき事をいふにや。凡和歌の道広く



其みなもととは神道の奥義に叶ひ、詩賦にもとづき
 聖賢の心をやしなひ、讃仏乗の理を悟り、から
 のやまとの事まで歌人は居ながら名所をしる。

『あこぎが浦に引あみのたびかさなれば顯はれに
 ける』と、常々いへることのはを聞しらぬほどの
 おろかにて、いかにかく歌をよみぬべき。

夫末世に至ては人のちゑさきにたち、かたじけ
 なくも赤人・躬恒・貫之のつらね給ひし歌などと
 ころぐにおぼえてしたりがほに物語せしを聞に、
 文字の並びをかしき事をいひつゝけて、誰の歌な
 ど、いかめしくのゝしる。しれる人は片腹いたく侍るべし。其道にくらく、人の嘲をわきまへず口にまかせ

て歌ものがたり、をのれが恥は愚よりうつる。されば先達の詠歌にも、なき詞をとり集をのれがせちにてよ
 しあしの批判する事、非学不道の愚人ども世になべて多ければ、況や吾等が噂よろしからぬは断也。これ
 誠に世の人の心つたなく、和歌の道にくらきが致す所也。かく世の末に誰あきらむる人もあらじ。

且は和歌の威徳を施し、わが身の無実の事をも祈らむ為にこもり居る也。此御神のいにしへ、無実のつみ
 を晴さむとの御誓ひなれば、ひとへに御神の利生を蒙り、濁世末代の和歌の道さへ捨らねば、をのづから歌



に心をよせ学ぶ人も多からむ。さる程ならば、自然と得心してあやまりもなかるべし。さあらん時は、某が
あこぎのことはをしらぬとも、又は返歌を得せぬとも、遂にはそしりも止めべしと、かやうにいのり申」と
語り給へば、中にも女性すゝみ出、

「まことに有難き御心ばへかな。みづからは疱瘡の神にて候。それ、人と成ては、疱瘡といふ事、貴賤によ
らずのがれぬとみえたり。其身運つよきは堅固に仕課せ、微運の輩は多く其身を棄。されば疱瘡おもてに見
へしより吾を尊敬し、火を改て精進すといへども、悪かるべきもがさには俄に仰天して、父母けんぞくさし
あつまりさまぐのたわ事いひちらし、迷ひの心みだりにして科なき他人を恨み、色々看病するといへども、
限りある命なれば終の道にとおもむく。死後までも後悔やむ事なく、いかなる悪神の来りてとり殺したるや
と、目にもみえぬ事にあらぬ難をいひて恨み、尊敬のこゝろ忽に引かへ悪口する事、理にくらきが致す所な
り。その身貧き者は万うちすてをのがまゝにするといへども、運つよき者はやすらかに命もつゝがなし。よ
ろづのさはりをいとふ事にしもあらば、貧賤の者は一人も助かるまじ。人力の及ぬ所、若力に叶ふ事にしも
あらば、上天子より下富貴の者まで諸寺諸山に立願し、誦誦修法おこたる事なければ、諸天の庇護、仏神の
きどくにても、命に何かとこほり有べきなれども、定業の致す所は是非なき次第也。これらは誠に諸人の
鏡ならずや。此理にまよふが故に科なき神を恨む。

さればとて万の事を破るにあらず。吾人の因果をしらしめ後悔なかれと思ふゆへに、とにかくに生じては
大方のがれぬ道なれば、勝負は運によるべし。神あしければ死たるなどあらぬ難に逢ふ事、我あしかれとは